ささやかな〝生〟の充足描く

「無事の日」

佐伯　一麦著

デビュー時から知っている同世代の作家の作品を読むとき、そこには何がしかの思い入れが働く。テーマ、作風、文体はその後どうなったか。そこから作家の今を生きる現場の息づかいと緊張、歓びらを感じとろうとする。

作者は二十五歳で文芸雑誌の新人賞を受賞し、その後、《私小説》というジャンルを正統にうけついできた一人だ。事象を的確につかみとる眼ざしと筆力もさることながら、何よりも生きることへの真摯な態度の強烈さは新鮮なものがあった。その作者も四十を越し、離婚と再婚、宿痾の喘息と鬱病での入院、現在の連れの女性の思いがけない人身事故とありながら、日々の暮らしを立て直しどうにか生きている。ここには、それら一見、平穏に思える日常の底にある解決不能な現実を描くことで、むしろそこを生ききることに、事はあって事は無い(無事)世界を見ようとしているかのようだ。並列された八つの短編はその刹那を垣間見せるモノクロの記録映画を思わせ、繊細な文体で織りなす微妙な陰影の重なりは各編を追うごとに色濃さを増してくる。

集英社・1600円

高校の同級生とひさしぶりに再会し、かつての仲間の近況を語りあう場面で、「それにしても、どうにかなっちまったり死んじまった奴ばっかりだよな、消息がはっきりしているのは」。そう吐きすてる相手に、行方の知れないのは無事の証拠かもしれないと作者はあらためて思う(『汀にて』)。また、最終章の『春の枯葉』では、毎日、同じバスターミナルで、変わらぬ風情でひっそりと立つ老婆の姿が、初め、奇異にうつっていた作者は、やがて言い知れぬ安堵をもちはじめる。

「ああして待っている限りは無事なのだろうな。しかしあの隠者のような静まりの底にいて、この世に何を聞いているのだろう、この世の何が聞こえているのだろう」

焦点はここにきて俄かに輪郭を浮き上がらせる。それは我々が感受できなくなり久しい、ささやかであるがゆえ忘れてしまった〝生〟の充足なのだ。私たちはその遥か手前で多くの無事を難事とし見過ごしているとも言える。

評・宮本誠一(小規模作業所「夢屋」代表)